

神奈川文芸賞 [2022]

押復
お返事が遅くなり、気がつけば新年になってしま
いました。いかがお過ごしでしょうか。送って来た
さつたマクロの詰め合わせは家族でおせちと一緒に
いただきました。明子さまが住んでいらっしゃる
曾木木にも従兄弟がいるので、何度も訪ねたことが
あります。いつか能登の魚をお送りしますね。孝爾
くんにもよろしくお伝えください。自愛のほどお
祈りいたします。
一月六日

加藤明子様
石黒玲香

ダイソーで買った五枚入りセットの最後の便箋に
こう書く。玲香はボールペンを置いた。この味気
ない数行を書くのに、もう日は落ちていて、がたが
た揺れる窓に吹きつける雪がちらちら光っていら
る。便箋に文字を埋めては棄て、埋めては棄てを繰
り返すことに、ぼろぼろと言葉が抜け落ちていき、
残った一枚は機械が書いたようだと玲香は思った。
国語の成績は悪くないし、作文で賞をとったことも
あるし、『大人の手紙の綴り方・七つの技術』とい
う本も借りてきたし、小説もブログもよく読んでい
るのに、この往信がどう書かれたらいいのかわから
なかった。なにより、能登半島の突端から三浦半島
の突端まで届けられるはずのこの手紙を、投函すべ
きかどうかも分かっていなかった。

今日で冬休みが終わるという日に、吹雪は勢いを
増していた。冬休みの間、こっそり予定を立てて会
う友達もいなかった。玲香はそのほとんどの時
間を自宅で過ごしていた。そもそも彼女の住む狼火
町という集落には友達が一人もいない。同級生だっ
た男子は小学校高学年になった時にこの町から去っ
て、よく遊んでいた三つ上の女子は金沢にある高校
の寮に入っていた。それきり一緒に遊ぶような友達
はいなくなり、中学に上がる頃には自宅で一人で楽
しめるような、たとえばアニメや漫画や小説やイン
ターネットに親しむようになっていた。

家からちょっと歩いたところにある空き地には、
その昔、小学校があったのだという。今はただ広い
い荒地に二宮金次郎の石像がぼつんと立っている
だけで、子供の遊び場にはなっていない。そこで
で最後に遊んだのはずいぶん古い記憶だった。玲香
の父は、とぎとぎこの広場の草刈りをしているらし
く、いつか、「誰に頼まれてるわけやないの」とい
う母の小言に、「だら！ せんかったら、じい
ちゃん悲しむがいや」と怒鳴ったことがあった。祖
父は五年前に亡くなっていて、母がぼそりと「そん
なが、使わんばさかい」と言っていたのを、玲香
は寂しいわけでも悲しいわけでもなく、なにか複雑
な感情とともに記憶している。

この田舎を出たいと思つたことがあっても、町に恨
めしさを感じているわけではなかった。彼女にとっ
て退屈な場所には間違いないが、嫌いとまでは思わ
なかった。小学生の頃、ほかの町の児童との関わり
において、距離の問題が派閥じみたものの形成を決
定づけていると気づいて絶望的な気分になったこと
はあったけれど、もはや今の玲香にとっては関係な
く、むしろ、日本の辺境の奥能登の、さらに辺境

の狼火町という場所に暮らしている事実、決して
誇らしくはなるとも、自分という人間の代えがたさ
を信じさせてくれるものだった。もしかするとそれ
は、彼女が予測する人生で、いつか必ずこの町を出
るといふ決断事があったからかもしれない。玲香は
したたかに、狼火町を人生の一点に位置づけること
で、自身のアイデンティティの問題としてこの田舎
町を認めていた。

そのせいか、限界集落でしか、少子高齢化だとか、
そんな言葉を社会の授業やテレビの報道で聞く度
に、なんだかむず痒さを感じた。大人たちは地方の
現状を大問題だといわんばかりに騒ぎだてるが、積
累するわけでも開き直るわけでもなく、遠巻きに指
を差している。この町に向かって。私に向かって。
玲香はそんな居心地の悪さを覚えていた。

この薄ぼんやりとした考えを加藤孝爾に伝えたの
は、奥能登に初雪が降った十一月の終わり頃、「チ
ャット・チェンバー」という、ランダムに選択され
た匿名の相手と一対一で、テキストを送り合うウェ
ブサイトで暇をつぶしていた時のことだった。顔も
住まいも性別も曖昧な匿名の集合体の一部だった二
人は、チャットを始めた十分後には互いの輪郭をか
すかに感じとり、三十分後には近い境遇の仲間であ
ることを認め合い、一時間半後にはメールアドレス
を交換した。

神奈川
文芸賞

小説部門：準大賞
鯖の雪おろし
／足和田 健



イラスト／星野莉子(県立相模原弥栄高校美術部2年)

ーネットに入り浸る同類の誰かに気づいてほしかっ
た。また、匿名の誰かの人間像をテキストだけであ
ぶり出す行為そのものに知的な興奮があった。暗闇
で体をまきり合うようにして確かな感触を得られ
た瞬間には、地獄や血縁を排した純粋な行為として
の出会いの喜び、言ってみれば、人と人が結びつ
く瞬間に生じる官能が感じられた。「チャット・チ
ェンバー」ではとぎとぎさういった感覚が刺激され
た。玲香は孝爾は「田舎猫」について話す過程でそ
の精神的な出会いを果たしていた。

それから数往復のメールのやり取りの後、二人は
電話の約束をした。その日は雪がやんでいたのに、
見晴らしのいい狼火灯台まで行って電話をかけるこ
とにした。

初めに聞いた孝爾の声は、はるか沖から吹いてく
る海風のせいだけ切れ切れになっていた。どうやら孝
爾も海の近くにいるらしく、波の砕ける音がこちら
とあちらで二重に聞こえてくる。おれ、城ヶ島とい
うところの灯台まで来ていて、うんざりしたらめ
ん。私も狼火の灯台にいるから大丈夫。あ、そうなの、
考えてること一緒じゃん。そつやね。携帯電話
を耳に押し付けるようにして、体を丸めながらそん
な会話をした。退屈な田舎に住んでいて、普段はア
ニメばかり見ている、でも、それほど田舎が嫌いじ
やなくて、海を見るのが好き。運命」とい言葉
を信じているほど能天気ではなかったにせよ、この時
きはロマンチックな陶酔が全身を巡った。

孝爾は雪を見たことがないと言った。「そつちは
積もっているんでしょ」と聞くと、そんなことは
ないと答えた。いわゆる雪国のイメージほど、海岸
沿いには雪が積もらない。吹きすさぶ風が雪を飛ば
してしまつと、海面が暖かいから溶けてしまつたの
だ、と父から聞いたことがあった。

「だから、こつちで降った雪は、孝爾くんに見える
海とも繋がっているんよ」
あまりに気障だと自分で思ったが、玲香は酔いに
任せて口に出した。ごおとおと城ヶ島の風が携帯の
マイクを通じて聞こえてくると、海のはるか北の方
を眺めながら、頭の中で世界地図を描いた。日本海
を越えて、ユーラシア大陸と北極とオセアニア大陸
を越えて、太平洋を越えて、再び日本列島に戻って
きたその場所に、孝爾はいる。まだ顔を見たこと
もないその人が、灯台に背を向かしている。孝爾
と背中合わせに座っているようだった。二人は正反
対を向いて、海に向かって結ばれる一点を見つめる
ことで、はるかな距離が折られたまわっていくように
感じた。

その後もやりとりは毎日続いた。玲香が気に入っ
ているアニメを教える、三日後には孝爾が全話見
たと言いつつ、そのアニメの話題で盛り上がった。孝爾
が聴いているバンドをすすめて、三日後には玲香
がレンタルショップで借りてきたCDの写真を送っ
た。そのために玲香は、父にバンド名を書いたメモ
を渡して仕事の帰路を遠回りさせた。
とぎとぎ恋愛の話もした。玲香は狼火町に住む唯
一の同級生だった男子と手を繋いだことがあった。
学区の最果てに住む一人は、いつもスクールバスの
最後の乗客で、小学三年生のホワイトデーにキャン
ディをもらった後、玲香から手を握った。翌年にな
ると彼がクラスでいじめられるようになったからバ
レンタインデーにチョコを渡すことになったから、
もちろんホワイトデーに手を握らなへんこともなかつ
た。さらに翌年、彼は家族と一緒に京都に引っ越し
た。ともかく、男子の手を握ったことがあるという
事実だけを話した。

孝爾は小学校を卒業する日、横浜の私立中学に進
むよ。」。一分钟后に「まじっ」と返事が来た。テレ
ビでは中年の男性タレントが湾沿いの道を歩きなが
ら「昔はせめてこんな町並みだったからさ。懐かし
くてウルッとささささ」と言った。携帯に目をや
って「まじまじ」と返すと、三分後に電話がかかっ
てきて、急いで二階の自室に飛び込んだ。

「孝爾が今見る番組さ、たぶんおぼちゃんさんの店が
出るんだよ」
ちょうど下校中だという孝爾が言った。彼の祖母
は三崎でスナックを営んでいると聞いていた。
「えっ、まじっ」
「なんだって、見たごやん」
「やだやだ」
孝爾は照れているようだったが、興味を勝ったの
で問答を打ち切って階下に戻ると、タレントの男が
商店街を散歩しながら「アール・テコが素晴らしい」
なんて「コメンタリー」しているのをみだりだ。以前、孝爾
は「三崎にはなんもないよ」と泉れていたが、十
分栄えていると思った。玲香が住む町には洒落た看
板のある建物なんてないし、本屋も飲み屋もない。
外を歩く人もいない。漁港と旅館と道の駅と、まは
らに住宅があるだけだった。

「じゃ、一杯やっちゃいますか」
母が寝息を立て始めたところで、タレントの男は
スナックに向かう素振りを見せた。細い路地を縫っ
て目的地に向かう間、ナレーターが言う。
「漁師町のスナック、期待が膨らみますねえ。〇〇
さん、飲みすぎませんように」
カットが替わると、こじんまりとしたオレンジ色
のテント看板に白字で「スナック明子」と書かれた
店が現れた。分厚いドアが開いて映ったのは、茶色
の髪を後ろで束ねて、群青色の着物を纏った、都会
っぽい女だった。田舎にはいない顔をしている。そ
う玲香が思ったところで、ふと、孝爾より先に孝爾
の祖母の顔を見つけたことに気がついた。

「ママ、お若いすねえ」
「いやね、五十九歳になるんです」
「ええっ」
男が大きなけぞったのを、孝爾の祖母は手で
口を覆って、ふと上品笑った。
「十九歳の時に三崎に来たものだから、もう四十
年もこの仕事で」
「どうですか、そうですか。もともとどっちに？」
「奥能登の曾木木というところからです」
「ずいぶん遠くから。どうして三崎に？」
「縁というかなんというか。当時はマグロ漁が栄
えていた頃で、船員さんがたんまりお金を持って帰
ってくるものだから、お酒を出す店が要るでしょ
う。それで店を作るから、三崎に来いって」
「奥能登から」
「いえ、当時は赤坂で働いていて、三崎が儲かるん
だって、オナーに説得されたんです」
「すごい時代だったんですねえ」
「ええ。毎日とんちゃん騒ぎでした。船が帰港した
宴会の翌朝は、道端に一万円札が落ちていたん
らなんです」

男は大笑いした。孝爾の祖母の口から「奥能登の
曾木木」という、よく知る地名が出てきたことが玲
香にとって衝撃だった。曾木木といえば狼火町から
車で二十分の距離で、従兄弟家族が住んでいる。見
た目も言葉も都会っぽい孝爾の祖母が、その出身
だったなんて。玲香は混乱していた。
「玲ちゃん、洗濯畳ませませ」
母がむくりと起きて、田舎っぽい口調で言った。
玲香は「瞬間」もってから、「これが終わってから」
と返すと、「じいちゃんもいんで」と喧嘩して居間から
出ていった。孝爾にメールを打つと、握りしめて
いた携帯を開いた。曾木木という場所がいかにか玲香
のよく知るところであるか、絵文字と感嘆符を駆使
して熱く、驚きと喜びを込めて送った。
それから男がビールを二、三杯飲み「鯖の雪おろ
し」といって、衣をつけて揚げた鯖に大根おろしをの
せた素朴な料理——「松輪鯖と三浦大根を使った郷
土料理で、明子ママの得意料理」だとナレーターが
説明した——を平らげ、店を立ち去るまでの間、再
び奥能登の話が上がるのかと胸を騒がせたが、



神奈川文芸賞 [2022]

現代詩部門：準大賞

氷川丸／牛久保夏帆

山下公園に足を運ぶ
夏の日差しがわたしの顔を照らす
目の前には青い海
どこまでもどこまでも続く
あの水平線の向こうには何があるのかな
そんなことを思いながら、ぼんやりとする
ふと、わたしは一隻の船が目にとまった
迫力のある大きさ
赤と白の煙突
あれは氷川丸だ
中に入ってみたい
ここは本当に日本なのか
高い天井やアール・デコの装飾
まるで異国の地にいるようだ
年季が入った古い扉や階段
ダンスパーティーをした社交室
今まで大切に扱われてきたのだろう
長い歴史が刻み込まれている
古いからこそ美しいものがあるのだ
こつこつものこのごなか
本当に美しいと思いをよせる
目を閉じれば、浮かぶ
人々の姿が
耳を澄ませば、聞こえる
人々の笑い声
今から九十年ほど前
氷川丸は人生で一番かかっていた
でも、それは永遠にはつづかない

その期待もむなしく、男性タレント一行は次のヌナックへと移動した。
奥能登という場所に互いの人生の接点を持ったことは、やはり「運命」というような言葉で説明されるのではない。そんな言いがかりに、二人は写真を送り合うことを承した。だが、正方形の画角に収まった孝爾の顔が送られてきた際には、意外にも反応に困るような顔があった。かねてからの予想を上にも下にも振れることがなかったからともいえるが、実際には、まだ二人の間を漂っていた「チャット・チェンバー」由来する匿名性の残滓が、孝爾の祖母の登場によって完全に消滅していったからであり、もはや孝爾の存在を疑う余地がなかったことが大きかった。しかし同時に、いくつもの山脈と都市と無数の田舎町が二人を隔てているという事実が、以前より現実味を増しているように、玲香は考えるようになった。

玲香が孝爾と出会うためには、おそらくは中学と高校を卒業して、関東の大学に進学する必要があった。それ以外の案は思い浮かばなかったし抽出しようともしなかったが、大学に入って、孝爾と一緒に暮らす生活を考えてみることもあった。二人でスーパーに行くと、二人で携帯ゲームをして、二人でお風呂に入ると……。その細部をインターネットで読んだ友人小説や同人漫画などから引用した、継ぎ接ぎの妄想として思い浮かべた。もちろん玲香に恋愛経験はないし、彼女の現実と同様するカップルのモデルケースなど存在しないからだ。いずれにせよ、孝爾と出会う瞬間は、最長でも四年後まで先延ばしにされること分かっていった。

くではならなかったし、当然それはネットでの出会いだと告白するわけにはいかなかった。孝爾と同様の嘘を言おうと思った。誰かに相談したいと思っていたが、彼女の身の回りに孝爾を知っている人はいなかった。
クリスマス・イブの前日、終業式から家に帰ると例の加藤さんから荷物が届いた。母が告げた。特に疑問を向けられることなくやり過らせているらしく、この頃にはざわついた心も少しは落ち着いてきた。
居間のこたつで包みを解いていると、緩衝材の隙間に一枚の封筒が入っていることに気がついた。差出人には加藤明子と書いてある。孝爾の祖母だ。何枚かの紙が折り重ねられた厚みを確かめると、直感めいたものがはたらいた玲香は、自室に戻って封を開けることにした。

孝爾の全く自由勝手なこと、あなたに三崎の鮭を食べさせたと言っている聞かないもので、わたしの知る限り誠実で評判の問題から仕入れた品を送りたので……。迷惑でなければ是非召し上がっていただきたい。今の三崎は昔ほど活気がなくなっています。この町の人間は口を揃えて言うもので、玲香さんのお口にも合はせてあげたいです。
玲香さんは狼火に住んでいらつしやると聞いております。先日のテレビを見たとも伺っていますが、わたしは曹太木の生まれで、十歳までは奥能登のくろくろした海とともに育ちました。凍った海風が吹きつける厳しい冬のことなどは、里を出て赤坂にいた頃も、三崎にきた頃もよく心に思い浮かべ

ていました。ですが、娘が生まれ、孫が生まれた今では滅多に振り返ることがありません。孝爾から玲香さんのことを聞いて、久しぶりに奥能登の里山での日々を懐かしんでいる今日この頃です。
せっかくなりに余りがあるのですから、玲香さんの疑問にお答えいたします。どうしてわたしが曹太木から三崎に来たのか、その経緯を知りたがっている孝爾から頼まれるのですが、どうも孫に話すのもためらわれて、まあまあにしてしまっただけです。ですからこれを機に直接お伝えさせていただきます。あまり長くありませんよ心がけますので。
まずわたしが里を出て赤坂に移ったのは、生家の民権に遊びに来た、とあるお客が就職を取り次いでくれるといい、中学卒業からほとんどすべてに住まいも仕事も東京に用意してくれたからでした。都会へのおこがれで胸いっぱいだったわたしは、「お酌をするだけ」という言葉をよく考えもせず、とにかく東京で暮らせるのなら、飛び出すように里を離れた。その仕事というのが、料理屋で男の方のお相手をするもので、芸者ともいいますが、今考えてみれば、屋敷の中で過ごすばかりで、まるで東京の文化に触れたこととはありませんでした。身についた芸だっただけかなのです。それから一年や二年経って国の言葉がすいぶん扱ってきた頃になって、わたしを東京へ連れ出したオナーから「赤坂はもう駄目だ。三崎という漁師町があるからそこに行け」と告げられたのです。時勢もあつたのでしょう。東京での稼業はもうできないというのです。めつたやたらに半人前だと教えられたわたしは、これを機に仕事を探してもな、言われるがまま、はるか見知らぬ土地で「お酌をする」ことになりました。

二月二〇日
石黒玲香さま
加藤明子
追伸
鮭の書おろしを食べてみたいと仰っていたところで、すね。せっかくなので、作り方を書いた紙を同封いたします(三崎の婦人会で教わったレシピです)。三崎は暖かいところですから、この町で雪を見るには大根をすりおろすしかないのだと、故郷を思いながら作ることも、若い時分の微笑ましい反抗でした。今となってはごくありふれた家庭の味です。安物の鮭で結構ですので、テレビでは立派なものを使いましたけれど、是非作ってみてください。
この手紙に、年をまたいでまた返信を出せずにいたが、孝爾とのやり取りは続いてきた。祖母が手紙を忍びさせたことは彼も気づいていないらしく、玲香もどこぞら言及することはなかったが、早くお礼の品なり手紙なりを贈りなさいと母が急がせるので、冬休み最後の日になってようやく便箋と向き合うこととなった。この手紙に対する困惑は、書いても書いてもほどこれることはなかった。何時間もかけて、こんがらがった思いはひどく粗末な文章にしかならなかったが、封を閉じてしまったら、体裁は整ったように思えた。

水川丸も立ち向かうことになる
七十七年前のあのできごと、戦争に
赤十字のマークに、白い煙突
病院船へとすがたを変えた
負傷兵がつぎつぎと運ばれてい
聞こえるのは兵士たちのうめき声
あの笑い声はどこへ行ったのだ
わたしは胸が痛んだ
たぐさんの荒波を越えてきた水川丸
いつも人々のためにたらいだ水川丸
わたしはその歴史をかいま見ることができた

横濱港の水川丸は、航海の記憶と歴史を超えて、いま静かに停泊している。もう遠くの世界へ旅に出ることはないが、訪れる人々に過去の経験を伝えている。作者は夏のある日、実際に水川丸に乗ったのだろう。船内を実況中継するように進む叙述と想像が重なって、好奇心で視野が広がるときの感慨を伝える。やや散文的だが、ういういしがある。詩になった後、この感慨はどこへ進むか。十代の作者の航海は始まったばかりだろう。

玲香さんが疑問に思っただけのこととはいえ、突然このように身の上話をされて、さぞ、迷惑なことかと存じます。正直に申し上げますと、初めて同郷の友人に手紙を書くような、少しばかり浮ついたところがあることを告白いたします。なんせ屋敷にいた頃は手紙も電話も禁じられ、気づいたら独り親になって忙しなくてはならなかったのですから、故郷との縁が絶えてしまっただけのことです。図々しいようですが、同郷のあなたに、もし、わたしのよきな老人に構う暇があれば、これから申し上げることを聞いていただきたいのです。いらぬお節介りな態度でよく判っているつもりですが、賢俊な玲香さんであれば

朝井リョウ
その晩、玲香は珍しくキッチンに立って母を喜ばせた。衣をつけた鮭の切り身を油に投じると、水気を拭き取る工程をすつとばたかせた。ばちばちと熱い油が飛び散り、手の甲に小さな火傷を負った。
作品の掲載に当たっては、原文通りを原則としていますが、入賞作品は順次掲載します。
次回10日の予定

既にとんでもない数の物語が世の中に存在しているという事実は、書かれていない感情などもうないのではないかと、という恐怖に繋がります。何を書いてもありふれた内容になってしまうのではという不安が、書き手には常に宿ります。ただ、どのような人物が誰にどんな状況でどんな言葉で伝えるのか、そこを工夫することで、たとえそれが過去に何度も書かれてきたような感情だったとしても、読み手への印象は様変わりします。私はそれこそが小説の持つ一

蜂飼耳

講評

講評